水の旅人

生命の源は山

---水の旅①

合併した香南市は、海だけでなく山奥にある源流や、そこから流れてくる水をたたえる川、そして河口までを広く保有しています。

川の堰（せき）では子どもたちが水と遊び、川岸で釣りを楽しんだあの日。山・川・海の環境の変化が今、私たちにとってどんな影響を与えているかを考えてみませんか？

物部川の源流

旅のはじまり

水の旅は川の源流がある山から始めよう！

山に降った雨水は木の葉やコケ、落ち葉を通して土の中に染み込んでいくよ。そして長い時間をかけてゆっくり地の中を動き、やがてわき水となって川に流れていく…。

森は降った雨をしばらくためておく「緑のダム」の役割をしているんだよ。

山のちから

山には大切な働きがたくさんあります。一つには水を蓄えるための保水力があり、この力が高いほど土壌の流出や災害の防止にもなり、きれいな水を生み出します。

高知県は森林が県面積の84％を占めており、日本で一番の森林率です。その森が二酸化炭素を吸収し、酸素を排出する力は温暖化防止のためにとても大きな役割を担っています。

県では、県民みんなが森のサポーターになってほしいと「森林環境税」という独自の税を創設し、子どもたちの森林環境学習や森の保全のために使っています。

植林の間伐を

今、日本の山は元気がありません。なぜなら、安い輸入材が増え、国産材の需要が下がったことで林業の採算が取れなくなり、山の手入れが行き届いていないからです。

昭和25年から昭和45年まで県内では活発に植林が行われてきました。それから約50年…。木は価値のある大きさに成長してきましたが、間伐が行われず放置された森林は木の幹や根も細く密生したままです。かつての山を守る担い手も一千人以上従事していた当時に対し、今は100人以下。山の所有者の不在と高齢化世帯の増加だけが進み山を捨てる人も出てきています。

「間伐したい山があるのに、山の所有者がどこにいるのか、また境がどこにあるのか分からない」と香美森林組合の職員は話します。そのため、間伐面積は県の目標値に及んでいません。

平成19年11月のさおりが原

平成20年５月のさおりが原

ブナ林の下草「ミヤコザサ」の葉がシカに食べられ、半年間で荒れ地（下写真）のようになってしまいました。

皮を食べられた木は水分を吸収できなくなり枯れてしまう

物部川の上流域

物部川の源流にあたる三嶺（さんれい）地域では、急増するニホンジカによってササや樹木、希少植物が被害を受けています。

温暖化によって積雪が減り、越冬が容易になったことや天敵がいなくなったことなどがシカの増加につながっています。増えすぎたシカは飢えをしのぐため普段は食べない木の皮などを次々と食べて木を枯らしてしまいます。ミヤコザサのように地下茎が土壌を支えている植物なども好んで食べるため、食害が土砂崩れの原因になっています。香美市の山では年間一千頭ものシカを駆除していますが、いっこうに被害が減少していません。

この現状は三嶺だけの話ではありません。香我美町舞川や夜須町の羽尾・国光地区ではシカだけでなくカモシカによる食害も見られ、豊かな植生と大地の保水力を奪われ、山の土砂と一緒に川へ流れ出す水が濁水の原因にならないかと心配されています。

5月17日（土）には住民有志によるボランティアネットワーク「三嶺の森をまもるみんなの会」が木の幹をラスで巻いたり、防護ネットで囲んだりとシカから森林を守る活動を行いました。「源流の山の環境から取り戻すべきだ」と物部川流域の環境を考える組織と地元の山岳会が一緒に力を合わせました。

生き残った木を食べられないよう、防護ネットで囲む

「生命の源は山」この思いに共感しました

高知大学 農学部森林科学科３回生
五藤 健信 さん（野市町）

森林科学科の友人たちと今まで３、４回三嶺に登っています。１回生の時には間伐のボランティアにも参加しました。

山に興味を持ったのは進路を決めるとき。高知県に残りたくて「何ができるだろう」と考えた結果、山に囲まれた高知は山からの恩恵がたくさんあることからこの科を選びました。

今の三嶺の現状は仕方ないと思います。けれど、もっとたくさんの人に山に関心をもってもらいたい。香美市だけでなく川でつながっている香南市の人や農業、漁業の１次産業の人にもかかわることだから連携して山を守ってほしいです。今後、三嶺は気軽に自然を楽しめる山になってほしいと思います。